

道徳的価値「礼儀」の学びから見た社会科教科書に関する一考察

A Study on Social Studies Textbooks from the Viewpoint of Moral Value, “Politeness”

柴 崎 直 人

Naoto SHIBAZAKI

小学校社会科において「礼儀」を扱うときの教材として年中行事を取り上げ、それが教材としてどのような意義を持つのかに関して、人間関係形成力、社会参画力、地域社会に対する誇りと愛情の育成、そして食育との関連について検討した。その結果、例示された30の年中行事のすべてが、今後望まれる日本の教育と社会科のねらいに関連する要素を何らかの形で含むことが確認された。あわせて小学校社会科教材として扱う上での留意点が示された。

キーワード：社会科，教材，礼儀，年中行事

1. 問題の背景

個人がその人格を完成させる過程において、望ましい人間関係や集団生活、そして社会関係に関する学びや体験をすることは不可欠な要素といえる。また、望ましい人間関係を育み、期待される社会生活を送る上では、マナー、エチケット、礼儀作法などと呼称されるコミュニケーションがその潤滑油として大きな意味と価値を持っている。この社会生活は望ましい公民的資質を基盤としてはぐくまれるものであり、望ましい公民的資質は道徳性を基盤として形成される。

(1) 道徳的価値「礼儀」の重要性

道徳性の育成は、学校教育において道徳教育の形で展開される。道徳教育において、上記のマナー、エチケット、礼儀作法に関する道徳的価値は「礼儀」として扱われる。その重要性に関して「道徳に係る教育課程の改善等について(答申)」(平成26年10月21日 中央教育審議会)の中では冒頭に「道徳教育の使命」として次のような形で示されている。

「道徳教育においては、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を前提に、人が互いに尊重し協働して社会を形作っていく上で共通に求められるルールやマナーを学び、規範意識などを育むとともに、人としてよりよく生きる上で大切なものとは何か、自分はどのように生きるべ

きかなどについて、時には悩み、葛藤しつつ、考えを深め、自らの生き方を育んでいくことが求められる。」「道徳教育において、児童生徒の発達の段階等を踏まえ、例えば、社会のルールやマナー、人としてしてはならないことなどについてしっかりと身に付けさせることは必要不可欠である。」⁽¹⁾

このように道徳的価値「礼儀」(以下「礼儀」)は、道徳教育において身に着けさせることが必要不可欠な、重要な内容として例示されている。

(2) 「十分な状況」に向けた改定

道徳教育における教育課程は、平成27年3月の学習指導要領一部改正をもって道徳の教科化という形でその考え方が示された。その目的である道徳性の育成については、学習指導要領において、小学校・中学校ともに総則第1の2で「学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、(小学校のみ『外国語活動、』)総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、生徒(小学校は『児童』)の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。」とある。

また、道徳が「特別の教科」として成立する前提として、中央教育審議会の答申に「道徳教育の要である道徳の時間において、その特質を生かした授業が行われていない場合がある」

「学校や教員によって指導の格差が大きいことなど多くの課題が指摘されており、全体としては、いまだ不十分な状況にある」と指摘されているように⁽²⁾、十分な形では行われてこず、これを機として十分な実施が期待されている。

(3) 各教科における道徳教育

教育活動全体を通じて道徳性の育成をめざす学校教育においては、すべての教科において道徳教育としての指導が求められている。それは学習指導要領の各教科における「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」において「道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、〇〇科の特質に応じて適切な指導をすること。」とあることから明らかである。

では、各教科における道徳性の育成は、どのような手掛かりをもとに展開することができるのであろうか。

学校教育法第34条には、「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない」と定められており、この規定は中学校、高等学校、中等教育学校にも準用されている。つまりすべての教科において確実に用いられるべき手法が「教科書の使用」であることが伺える。

各教科の教科書の内容を道徳教育に用いることができれば、新たな道徳教材を教師が一から作成することもなく、各教科における道徳教育を効率よく展開することが可能となるだろう。また、教科書のどこにどのような形で「道徳教育の手掛かり」が存在しているかを教師が認識していることで、教科横断的な道徳教育の計画が可能となり、網羅的かつ効率的な展開が期待できよう。

道徳教育の十分な実施を図るうえで、各教科における教科書の活用はこのような重要性を持つものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は学校教育において使用される「教科書」に注目し、その中でも公民的資質の育成に強く関係する「社会科」を取り上げて、重要な

道徳的価値である「礼儀」を、それら教科書の記述を用いてどのような内容をどのように扱うことが可能であるかについて検討する。

3. 方法

(1) 手続き

我が国において発行されている小学校および中学校の社会科教科書のすべてにあたり、「礼儀」に関連すると考えられる記述箇所をすべて抽出し、それらについて「礼儀」に関するどのような内容が含まれているのかを筆者が分類し分析した。なお、一つの文中に複数の内容が含まれている場合はそれぞれの内容として複数カウントをおこなった。

なお、教科書の記述内容を「礼儀」として採用するにあたり、礼儀に関する事典の中でも最も詳細かつ豊富な内容を示していると考えられる2書（日高孝次他「礼儀作法の百科」(1985)小学館、千宗室・酒井美意子他「現代マナー事典」(1990)講談社）、および日本の礼儀作法の源流とされる小笠原流礼法の第三十二世宗家である小笠原忠統が記した礼法の理論書である「小笠原忠統『日本人の礼儀と心』(1994)ダン社」を典拠とし、これらが示す礼儀の内容と関連しない教科書の記述は不採択とした。

また、分析の手掛かりとして、次の3種の指標を用いた。

区分A：「礼儀」の内容そのものが明示されておりそのまま利用可能なもの

また「礼儀」に関する重要な知見が述べられているもの

区分B：内容そのものの記述はないが「礼儀」に関する記述があり利用可能なもの

区分C：資料準備や補足などの工夫次第で「礼儀」の学びに活用が可能なもの

このように、児童生徒が礼儀の学びに取り組むにあたって、「何を」「どのようにするのか」が明らかな記述が区分A、「何をやるのか」は示されているが「どのようにするのか」は示されていないものを区分B、児童生徒には「何をどのようにするのか」がわかりにくい、教師が「これを用いて何ができるか」を示すことで礼儀の学びが成立するものを区分Cとし、分析

の手掛かりとした。

(2) 分析対象とした教科書

小学校教科書については平成20年に改定された学習指導要領に準拠して作成され、平成27年度使用の社会科教科書および地図のすべてを分析対象とした。

中学校教科書については平成20年に改定された学習指導要領に準拠して作成され、平成28年度使用の社会科教科書および地図のすべてを分析対象とした。

小学校の教科書については、

東京書籍（3・4年上下・5年上下・6年上下 計6冊）

教育出版（3・4年上下・5年上下・6年上下 計6冊）

光村図書（3・4年上下・5年・6年 計4冊）

日本文教出版（3・4年上下・5年上下・6年上下 計6冊）

以上の4社22冊の教科書を手掛かりとした。

中学校の教科書については、

東京書籍（地理・歴史・公民各1冊 計3冊）

教育出版（地理・歴史・公民各1冊 計3冊）

帝国書院（地理・歴史・公民各1冊 計3冊）

日本文教出版（地理・歴史・公民各1冊 計3冊）

清水書院（歴史・公民各1冊 計2冊）

自由社（歴史・公民各1冊 計2冊）

育鵬社（歴史・公民各1冊 計2冊）

学び舎（歴史1冊 計1冊）

以上の8社19冊の教科書を手掛かりとした。

なお、地図については東京書籍（小学校1冊、中学校1冊）と帝国書院（小学校1冊、中学校1冊）の総計4冊であった。

3. 結果

(1) 社会科教科書における礼儀に関する内容の記述数

合計9社の社会科教科書における礼儀に関する内容の記述数は、小学校70、中学校109の計179であった（表1）。

(2) 礼儀の内容の分類

社会科教科書に見られる礼儀の内容を分類した結果は次の通りであった（表2）。

①小学校

小学校社会科教科書における礼儀の内容としては、〔日本文化と礼儀〕〔公共のモラル〕〔食の礼儀〕〔茶の礼儀〕〔異文化と礼儀〕〔礼儀正しい言動〕の6カテゴリに分類された（数字は出現頻度）。各カテゴリの詳細は次のとおりである。

〔日本文化と礼儀 14〕	年中行事14
〔公共のモラル 16〕	情報モラル9、公共の場6、日本人のモラル1
〔食の礼儀 6〕	外国の食事マナー6（韓国3 中国1 サウジアラビア1 諸外国1）
〔茶の礼儀 5〕	茶道5
〔異文化と礼儀 9〕	国旗8、韓国の礼儀1

表1 「礼儀」の内容数

	小学校							中学校					小中総計	
	3・4年上	3・4年下	5年上	5年下	6年上	6年下	地図	小学校計	地理	歴史	公民	地図		中学校計
東京書籍	7	5	5	4	2	13	0	36	10	6	11	2	29	65
教育出版	7	0	0	1	1	2		11	8	2	6		16	27
光村図書	2	1	4		3			10						10
帝国書院							0		9	5	8	2	24	24
日本文教出版	3	2	1	2	0	5		13	6	2	6		14	27
清水書院										1	6		7	7
自由社										3	2		5	5
育鵬社										4	9		13	13
学び舎										1			1	1
計	19	8	17		26		0	70	33	24	49	4	109	179

〔礼儀正しい言動20〕 聞く態度2, 話し方1, 言葉づかい1

②中学校

中学校社会科教科書における礼儀の内容としては, 〔礼儀の思想〕〔日本文化と礼儀〕〔食の礼儀〕〔茶の礼儀〕〔異文化と礼儀〕〔礼儀正しい言動〕の6カテゴリに分類された。各カテゴリの詳細は次のとおりである。

- 〔礼儀の思想 3〕 礼儀の思想1, 礼儀と文化1, 礼儀の話1
- 〔日本文化と礼儀 43〕 年中行事34, 寿賀5, 日本人の礼儀2, 日本の信仰1, 人生儀礼1
- 〔食の礼儀 22〕 食文化11, 食事7, 食の作法4
- 〔茶の礼儀 16〕 茶の湯8, 茶道7, 煎茶道1
- 〔異文化と礼儀 19〕 国旗・国歌12(国旗11, 国旗・国家1), 礼拝3(イスラム2, 各国1), 文化とは1, 異文化マナー1, 異文化の人生儀礼1, 異文化の挨拶1
- 〔礼儀正しい言動6〕 観劇5, 聞き取り調査時のマナー1

表2 礼儀の内容の分類(件数)

	小学校	割合	中学校	割合
礼儀の思想	0	0.0%	3	2.8%
日本文化と礼儀	14	20.0%	43	40.3%
公共のモラル	16	22.9%	0	0.0%
食の礼儀	6	8.6%	22	20.2%
茶の礼儀	5	7.1%	16	14.7%
異文化と礼儀	9	12.9%	19	16.5%
礼儀正しい言動	20	28.6%	6	5.5%
	70		109	

③学年・分野による礼儀の内容の分類

6つのカテゴリに分類された社会科教科書における礼儀の内容を, 小学校では学年ごと, 中学校では分野ごとに分類した(表3)。

表3 礼儀の内容の分類内訳(学年・分野)

	小学校				中学校				計
	3・4年	5年	6年	計	地理	歴史	公民	地図	
礼儀の思想						1	2		3
日本文化と礼儀	4		10	14	11	15	17		43
公共のモラル	8	8		16					0
食の礼儀			6	6	14		7	1	22
茶の礼儀			5	5	2	8	6		16
異文化と礼儀	1	3	5	9	5		11	3	19
礼儀正しい言動	14	6	0	20	1		5		6
	27	17	26	70	33	24	48	4	109

すると, 小学校社会科の教科書においては, 3・4年では27, 5年は17, 6年は26の礼儀の内容がそれぞれ示された。中学校社会科の教科書における各分野については, 地理33, 歴史24, 公民48, 地図4の礼儀の内容がそれぞれ示された。

(3) 教科書の記述状況による分類

社会科教科書に示される礼儀の内容を, 教科書における記述状況(礼儀の内容及びその表出である作法・ふるまい等の具体的な記述の有無)を手掛かりに, 児童生徒に内容を示す際の扱いやすさによって3つの区分に分類した。区分Aは「礼儀」の内容そのものが明示されておりそのまま利用可能なもの, 区分Bは内容そのものの記述はないが「礼儀」に関する記述があり利用可能なもの, 区分Cは資料準備や補足などの工夫次第で「礼儀」の学びに活用が可能なものとした。

その結果, 小学校においてはA19, B35, C16となり, 中学校においてはA15, B36, C58となった(表4)。

表4 礼儀の内容の分類(区分)

	小学校				中学校				計
	A	B	C	計	A	B	C		
礼儀の思想					2	1		3	
日本文化と礼儀		3	11	14	3	5	36	44	
公共のモラル	2	11	3	16					
食の礼儀	5	1		6	5	14	3	22	
茶の礼儀	2	2	1	5		9	7	16	
異文化と礼儀	1	8		9	5	6	7	18	
礼儀正しい言動	9	10	1	20		1	5	6	
計	19	35	16	70	15	36	58	109	

4. 考察

(1) 礼儀に関する記述数

小学校用社会科教科書を発行する4社のうち、「礼儀」に関する全記述数は70であった。その51.4%を占めたのが東京書籍で、36の記述が認められた。東京書籍は3・4年上、3・4年下、5年、6年のすべての教科書において他社よりも記述数が最も多かった。また、教科書1冊あたりの平均記述数は、東京書籍7.2、光村図書2.5日本文教出版2.2、教育出版1.8であった。

中学校用教科書でも記述数が最も多かったのは東京書籍の29で、全8社109記述のうち26.7%を占めた。また、東京書籍は地理・歴史・公民それぞれの分野において「礼儀」に関する記述数が最も多かった。教科書1冊あたりの平均記述数は、東京書籍9.0、帝国書院8.0、育鵬社6.5、教育出版5.3、日本文教出版4.7、清水書院3.5、自由社2.5、学び舎1.0であった。

記述Aの総数については、小学校は教育出版7、東京書籍5、光村出版4、日本文教3、中学校は東京書籍5、教育出版3、帝国書院3、自由社3、育鵬社2、であった。

以上から、「礼儀」に関する学びを社会科教科書から得ようとした場合、小学校および中学校教科書のうち東京書籍の出版物が記述数やその具体的・重要な内容が比較的多く示されており、教師による児童生徒の学びの指導にあたり有用性が高いことが考えられる。

(2) 礼儀の記述内容

①小学校と中学校の差異

小学校社会科教科書の記述には、中学校教科書には存在する「礼儀の思想」が見られなかった。それに対して中学校教科書には、小学校教科書に存在する「公共のモラル」に関する礼儀が見られなかった。

また、小学校は「礼儀正しい言動」に関する記述が28.6%とトップを占めるのに対して中学校はわずか5.5%と少ない。また中学校では「日本文化と礼儀」が40.3%と突出して多く、小学校の20.0%と比較しておよそ2倍の割合を占めている。

これについては、たとえば小学校学習指導要領においては「我が国の歴史や伝統を大切に

し」⁽³⁾ としか述べられていないのに対して、中学校の学習内容として、学習指導要領に「我が国の伝統と文化の特色を広い視野に立って考えさせる」⁽⁴⁾ とあるように、中学校では日本人文化への広範な取り組みがなされる。そこに日本人の精神性や、異文化圏から見た日本文化・日本の礼儀といった内容が採用される素地が整っていると考えられる。

以上から、社会科教科書を用いた「礼儀」の学びを指導するにあたり、小学校段階においては「礼儀正しい言動」を中心として「公共のモラル」を考えさせるような内容構成が組みやすいことがわかる。また児童の発達を鑑みても身近な「礼儀正しい言動」を中心に考えさせ、議論させることで、それらを確実に習得させることがこの時期において望ましいであろう。そのうえで中学校に進み、これまで実践してきた「礼儀」の伝統的・思想的な裏付けを行い、異文化圏の人々の視点からその補完をおこない、さらに食文化や異文化との異同の学びを経ることで、「礼儀」に関する学びの補充・深化・統合が期待できよう。

②記述内容と学年・分野

小学校においては、3・4年の27記述のうち、51.9%（17記述）を占める「礼儀正しい言動」が、学年の進行につれて減少して、6年では0%になる。それとは逆に、「異文化と礼儀」は3・4年3.7%（1記述）→5年17.6%（3記述）→6年18.5%（5記述）と増加していく。また、6年は「公共モラル」と「礼儀正しい言動」が0%だが、「日本文化と礼儀」が全26記述中の38.5%（10記述）を占めて最も多い。次いで3・4年と5年には存在しなかった「食の礼儀」「茶の礼儀」がそれぞれ23.1%（6記述）、19.2%（5記述）と出現している。この「日本文化と礼儀」の内容は、すべて年中行事に関する記述であった。3・4年が4記述、6年が10記述である。このように、学年が上がるにつれて礼儀正しい言動に関する記述が減少し、年中行事や茶といった日本文化に関する記述が増えるのは小学校から中学校への変化と同傾向であり、自分自身のふるまいといったミクロな視点から、日本文化や異文化というマクロな視点に

学年が上がるにつれて遷移していることが認められる。小学校においても中学年から高学年になるにつれ、身近な手掛かりから次第に視点を遠いところに置いて児童の視野を広げていく指導が求められるといえよう。

中学校において最も多かったのが、地理的分野においては「食の礼儀」(42.4%/14記述)、歴史的分野では「日本文化と礼儀」(62.5%/15記述)、公民的分野でも「日本文化と礼儀」(35.4%/17件)であった。このうち「食の礼儀」については他の国や地域における食習慣や、それと日本の食作法との比較に関するものが100%を占めていた。年中行事については全34記述中の、公民が50.0% (17記述)、地理が29.4% (10記述)、歴史が17.6% (7記述)であった。食文化と年中行事はともに身近な文化である。そこからいえば、これらの教科書の記述をもとに生徒が資料を集めたり、それを使用して考え、議論するなどの学習活動を行いやすいテーマであると考えられる。

③記述内容と区分

a) 区分A

小学校の区分A19記述は、「礼儀正しい言動」(47.4%/9記述)、「食の礼儀」(26.3%/5記述)、「公共のモラル」(10.5%/2記述)、「茶の礼儀」(10.5%/2記述)、「異文化と礼儀」(5.2%/1記述)で構成されている。

ここで特徴的なのは、「韓国の食事マナー」である。「食の礼儀」の5記述うち、「サウジアラビアの食事マナー」「中国の食事マナー」を除く3記述(60.0%)が韓国の食事マナーと食文化に関するものであった。これらはいずれも6年教科書の内容であるが、学習指導要領には第6学年2 内容(3)アに「我が国と経済や文化などの面でのつながりが深い国の人々の様子」とだけあり⁽⁵⁾、「解説」には「貿易や経済協力などの面、歴史や文化、スポーツの交流などの面で我が国とつながりが深い国を取り上げ」⁽⁶⁾とあるだけで、具体的な国名の記述はない。韓国の食作法と日本のそれとの比較は、使用する食器がほぼ同じではあるがその素材や用い方に差異があるため、礼儀の本質とそれを取りまく文化的な背景の学びが同時に得られる内

容と考えられる。

中学校の区分A16記述は「食の礼儀」(31.3%/5記述)、「異文化と礼儀」(31.3%/5記述)、「日本文化と礼儀」(18.8%/3記述)、「礼儀の思想」(12.5%/2記述)、「礼儀正しい言動」(6.3%/1記述)で構成されている。

ここで特徴的なのは「日本文化と礼儀」である。日本を訪れた外国人の目を通して日本人のマナーのよさやモラルの高さなど、日本人の礼儀正しさが指摘される記述があり、また「外来文化を受け入れる姿勢、自然を愛でる心、稲作中心の文化などが合わさって、日本人の「助け合い」や「和」の精神、「勤勉な気質」がはぐくまれた」(公民)という記述は日本人の精神性の成り立ちを示しており、「礼儀」を学ぶ上で非常に重要な位置を占めるものと考えられる。また「礼儀の思想」の2つの記述もいずれも公民的分野であり、中学校社会科の公民的分野は礼儀の原理や精神性を学ぶにあたり重要な科目であるといえよう。

b) 区分B

小学校の区分B35記述は

「公共のモラル」(31.4%/11記述)、「礼儀正しい言動」(28.6%/10記述)、「異文化と礼儀」(22.9%/8記述)、「日本文化と礼儀」(8.6%/3記述)、「茶の礼儀」(5.7%/2記述)、「食の礼儀」(2.9%/1記述)で構成されている。

「公共のモラル」11記述のうち、「公共の場」3記述(27.3%)を除いた8記述(72.2%)すべてが「ネットモラル(情報モラル)」である。携帯端末の普及により情報モラルの学びが喫緊の課題となっている現在の学校教育においては安全教育の意味も込めて身近でありかつ重要な学びのテーマとなる。また「異文化と礼儀」8記述のすべてが「国旗」に関するものであった。具体的に国旗の望ましい扱いが示されていない教科書であっても、「国家の象徴である国旗への各国民の思いをないがしろにしないようにする言動」は、そのまま「礼儀」の学びに直結するものである。

中学校の区分B36記述は、「食の礼儀」(38.9%/14記述)、「茶の礼儀」(25.0%/9記述)、「

「異文化と礼儀」(16.7%/6記述)、「日本文化と礼儀」(13.4%/5記述)、「礼儀の思想」(2.8%/1記述)、「礼儀正しい言動」(2.8%/1記述)で構成されている。

ここで特徴的なのは「茶の礼儀」である。茶会や茶席の写真が教科書に掲載されており、中には「千利休は、禅宗の影響を受け、名誉や富よりも内面の精神性を重視し、質素なわび茶の作法を完成させました。」などの記述もみられる⁽⁷⁾。直接的な茶室での作法が記述されていなくとも、茶道にどのような作法がみられるのか。またそれはどのような意味とその背景があるのかについて調べさせ、考えさせ、議論させることによって「礼儀」の学びは深化していくことだろう。この内容は茶道部の生徒や家族が茶道を学んでいる者など、身近に手掛かりを得られるという利点がある。そのような生徒に発言させるなどして複合的な学びを得ることも可能である。

c) 区分C

小学校の区分C

16記述は「日本文化と礼儀」(68.8%/11記述)、「公共のモラル」(18.8%/3記述)、「茶の礼儀」(6.3%/1記述)、「礼儀正しい言動」6.3%/1記述)で構成されている。特徴としてみられるのは、「日本文化と礼儀」の11記述すべてが「年中行事」という状況である。3・4年生では日本の市区町村など身近な地域の行事を取り上げ、6年生では中国や観光など異文化圏の年中行事が多く取り上げられている。小学校の年中行事13記述はB区分と区分Cにあり、とくにこのC区分に84.6%と集中しているが、直接的な礼儀や作法に関する記述はほとんど見られない傾向にある。

中学校の区分C 58記述は「日本文化と礼儀」(62.1%/36記述)、「茶の礼儀」(12.1%/7記述)、「異文化と礼儀」(12.1%/7記述)、「礼儀正しい言動」(8.6%/5記述)、「食の礼儀」(5.2%/3記述)で構成されている。ここでも特徴としてみられるのは、「日本文化と礼儀」の37記述のうち29記述(78.4%)が「年中行事」という状況である。「茶の礼儀」については歴史教科書における「茶の湯」に関する記述が5

記述あり、千利休の像と妙喜庵待庵の写真が示される。学習指導要領および解説には利休や待庵に関する直接の記述は見られないが、現代日本の礼儀に関係のある利休の茶について言及するきっかけとして有効と考えられる。年中行事については別項にて考察を加える。

(3) 社会科教科書から学ぶ「礼儀」

①年中行事について

年中行事は、「春には豊作を神にいのり、秋には稲の収穫を喜び、神に感謝をささげました。正月やお盆のように毎年くり返される年中行事にも、稲作文化の影響をうけたものがたくさんみられます。」⁽⁸⁾とあるように、人間が神に対して大事に思う心を表現しようとしたものに他ならない。飯倉晴武が指摘するように、日本人は自然現象や山川草木などあらゆるものに神を見出し、敬うことで豊穰を祈り、共同体の結束をはかってきており、そのような独自の感性が日本のしきたりや年中行事の根底にある⁽⁹⁾。このように、人間が神に示した礼儀の表れが年中行事であり、その内容や含まれる作法は礼儀の学びの大きな手掛かりとなるものである。また、道徳の学び全体における観点からは、「特別の教科 道徳」における「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」に示される「(21) 美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること」に深く関連する内容といえる。

たとえば三月三日のひな祭りにはひな人形を飾るが、その人形の配列には決まりがある。内裏雛における男雛と女雛、老人の姿の左大臣と青年の姿の右大臣など、すべて「左上位」という日本の上座下座の礼儀に従って配列がなされている。並んで立ったときに左手側にいるものが上位という考え方である⁽¹⁰⁾。これを知っていれば、天皇である男雛や上位である左大臣を左側(向かって右側)に配置すべきことが容易に理解できる。これらについて児童生徒に「なぜ?」と考えさせることにより、配席による敬意の表し方の礼儀の学びが得られる。また、ひな飾りは「四日にはほこりを払い、来年のためにしまっ

ておきます」「いつまでもおひな様を飾っておくと、娘の縁づくのが遅れる、と戒めるところもあります。」⁽¹¹⁾ と、すぐに片づける作法がある。これはもともとこの行事が三月上巳の祓であり、「健康を祈って災厄を祓うために、草やわらでつくった人形の体を撫で、穢を移したものを」⁽¹²⁾ を川や海に流していたのが原型である。そのためすぐに片づける必要があった。この年中行事をはじめとする身近な行事のしきたりや作法、その根底にある礼儀について、児童生徒に調べさせ、考えさせ、説明させ、議論させることは、礼儀の学びのほかにも「人間の力を超えたものに対する畏敬の念の深まり」に寄与するものと考えられる。

②寿賀について

中学校の区分Cにのみ5記述存在する「寿賀」だが、これはすべて六十干支（十干十二支）の記述をさすものである。六十干支が一巡したのち、またもとの生まれ年の干支を迎えて祝う行事「還暦」で、赤いちゃんちゃんこを送って長寿を祈念するしきたりは、年長者への敬意を表す礼儀がその根底にある。それを手掛かりとして古希、喜寿、米寿などの歳祝いに関する話題につなげたり、調べさせて発表させてもよいだろう。「寿命」をもとにして生命の尊さに関する学びが期待できる。

③食の礼儀について

社会科教科書にみられる「食の礼儀」は、異文化圏における食事やその礼儀作法に関するものであった。なかには「日本では、おわんを手で持って食べますが、韓国では器を手で持ったり、食器に口をつけたりするのは、行儀の悪いことだとされています。」と具体的な作法にまで言及している記述もある⁽¹³⁾。このような文化の差異をもとに児童生徒に「日本ではどのようにするのだろう」「それはなぜだろう」「それとは違うような場合にはどうやるのが望ましいだろう」と考えさせ、さらにその奥に存在する食材や調理者などへの敬意と感謝、また食材の生命そのものへの敬意などにつなげていくことが望まれる。ここで留意したいのは、箸遣いや器の扱い方という「行為」の学びにしないことである。行為を避ける必要はないが、それ自体を

目的にするのではなく「なぜそのように扱うのか」という、作法の中に埋伏している礼儀の本質を目的にするのである。

このことは「茶の礼儀」においても同様である。茶道の作法についての詳細な記述のある教科書もあり⁽¹⁴⁾、有力な学びの手掛かりになるのだが、礼儀の学びにおいて焦点化すべきは「なぜそうするのか」である。小学校学習指導要領社会科の目標（3）に「考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。」とあり、また中学校公民分野の目標（4）には「多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。」とある。よって、なぜ抹茶を飲む前に茶碗を回すのか。それを調べさせ、考えさせ、議論させ、説明させることで、道徳の学びと社会科の学びを同時に得ることも期待できるといえよう。

④国旗と国際儀礼について

中学校学習指導要領公民的分の「内容の取扱い」には、「(ウ)「国家間の相互の主権の尊重と協力」との関連で、国旗及び国歌の意義並びにそれらを相互に尊重することが国際的な儀礼であることを理解させ、それらを尊重する態度を育てるよう配慮すること。」が示されている⁽¹⁵⁾。国旗の扱いについては自由社の「新しい公民教科書」に「国旗掲揚の国際儀礼」として10項目にわたり詳細に示されている。これは国際儀礼（プロトコール）によるものであり、生徒が「礼儀」の学びを収めるうえで確実に知っておいて欲しい分野である。礼儀は挨拶のような人間と人間の間で表現されるものや、年中行事や人生儀礼のように人間と神との間で表現されるものだけではない。国と国との間でも表現されるべきものなのである。国旗に関する礼儀の学びは、国家間にも相互に敬意を表す文化が存在しているという認識につながる。そしてそれは「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎」を固める重要な手掛かりなのである。

⑤社会科における道徳の指導について

このように、社会科教科書には道徳的価値「礼儀」に関する記述が随所にみられ、しかも

その内容は多様である。その中には非常に具体的に礼儀の原理や思想について言及するものもあれば、具体的な作法を述べているものもある。それではこれら潤沢な「礼儀」の学びの手掛かりを、「社会科」においてどのように扱うことが望ましいのであろうか。

平成27年3月に公示された学習指導要領において、「特別の教科 道徳」が従来の「道徳の時間」から新たに位置づけられることになり、道徳に関する授業の目標、指導方法、評価方法も根本的に転換することになった。とくに指導方法はついては、小学校および中学校の学習指導要領において「問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習を適切に取り入れる」と明言されている。

そこで、社会科における「道徳」の学びに際しては、記述内容から得られるテーマに即した課題を具体的に児童生徒に示し、そのあとで「なぜこのようになったのだろう」「自分ならどのようにするだろう」などについて、多面的・多角的に考えさせるようにする。そして主体的に判断させ、人間としての生き方・あり方について考えを深めていくような指導を重ねることが望ましいだろう。

また、柳沼が「礼儀作法やマナーによる学習は、動作や所作を具体的に理解したうえで、それを体験的に学習することも有効である。特に、伝統的な礼儀作法やマナーについては、基本的な知識や技法を理解したうえで、実際のさまざまな場面を想定してシミュレーション型の体験的な学習を自分でも行ってみることで習得できる。」⁽¹⁶⁾と指摘するように、具体的な所作を体験しながら、その本質についても考えさせる、という方法が考えられる。ただしここでも重要なのは、単に道徳的行為の「型」を学ぶのではない、と児童生徒に意識づけを施すことである。そのあとに必ず学んだ内容と道徳的価値との関連付けを行う営みが求められよう。

5. おわりに

以上のように、小学校および中学校の社会科において、道徳的価値である「礼儀」を、教科書の記述を用いてどのような内容をどのように

扱うことが可能であるかについて検討した。社会科に関する小学校と中学校のすべての教科書類計45冊にあたり、道徳的価値「礼儀」に関する記述を抽出したところ179記述を得た。それらを分析した結果、社会科の教科書には、礼儀の思想、日本文化と礼儀、公共のモラル、食の礼儀、茶の礼儀、異文化と礼儀、礼儀正しい言動の7カテゴリが認められた。また、小学校から中学校にかけての社会科における礼儀の内容の構造や、組みやすく習得させやすい内容構成、指導に際しての教師の視点のあり方が示された。記述の内容からは、礼儀の本質とそれを取りまく文化的な背景の学びが社会科の学びと同時に得られることや、とくに公民的分野が礼儀の原理や精神性を学ぶにあたり重要であることが指摘された。更に年中行事、寿賀、国旗と国際儀礼の内容について検討が加えられた。社会科における道徳の指導については、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れる際の留意点が指摘された。

今後は他教科の教科書における「礼儀」に注目して調査をすすめ、日本の教科教育における道徳的価値「礼儀」の指導の可能性を検討していく所存である。

【引用文献】

- (1) 中央教育審議会 (2014) 道徳に係る教育課程の改善等について (答申), 文部科学省, p.2.
- (2) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版, p.2.
- (3) 同上, p120.
- (4) 同上, p126.
- (5) 同上, p121.
- (6) 同上, p 95.
- (7) 東京書籍 (2016) 新編 新しい社会 歴史, p110.
- (8) 帝国書院 (2016) 中学生の公民 より良い社会をめざして』, p15.
- (9) 飯倉晴武 (2003) 日本人のしきたり, 青春出版社, p20.
- (10) 永田久 (1989) 年中行事を科学する, 日本経済新聞社, pp.80-81.
- (11) 千宗室他監修 (1990) 現代マナー事典, 講談社, p582.
- (12) 川口健二・池田孝・池田政弘 (1978) 年中行事

儀礼事典, 東京美術, p68.

(13)東京書籍 (2015) 新編 新しい社会 6 下, p7.

(14)東京書籍 (2015) 新編 新しい社会 6 上, p64.

(15)文部科学省 (2008) 前掲書, p133.

(16)柳沼良太 (2016) 問題解決型の道徳授業事例集,
図書文化, p14.

【参考文献】

日高孝次他 (1985) 礼儀作法の百科, 小学館.

千宗室・酒井美意子他 (1990) 『現代マナー事典』
講談社.

小笠原忠統 (1994) 『日本人の礼儀と心』 ダン社.